



卓 話



「ロータリアンとは」 国際ロータリー第2580地区 ガバナー 上野 操氏

ガバナー公式訪問の卓話ということで役割がた、話の内容が難しくなりますがご了承頂きたいと存じます。



国際協議会に今年の1月に行き参りました時、会長のレイ・クリギンスミス氏が、貴方は国に帰って各クラブに戻った時、或いは地域社会でロータリアン以外の人達と交わった後で、ロータリアンとは何かという質問をされた場合に対する簡潔な答えを考えておいた方がいいのではないかとおっしゃいました。又、改めてロータリーの本質を再認識してもらえるような的確な答えを用意しなさいともおっしゃいました。そこで今日はロータリアンの皆さんに、私なりにロータリアンとは何かということについてお話をしたいと思えます。

ロータリーとは何かということについては、ポール・ハリスの的確な定義を引用して説明に入らせて頂きます。ポール・ハリスは「ロータリーは決して宗教ではない、また宗教に代わるべきものでもない。それは古くから存在している道德観であり、それを我々の現代生活の中でも特に職業生活において実践すべきである。」と言っています。言葉を変えて簡訳しますと「ロータリーは宗教ではなく道德である。その中身は普遍的な道德観である。それを我々の職業生活において適用するというのがロータリーの本質である。」と言っていると思えます。そこで宗教と道德の違いは何か、又何故色々な生活がある中で職業生活においてまず実践せよというのか、そのあたりの疑問が出てきます。

少し話しが変わりますが、我々人間の存在の本質は何かという哲学に近い話をします。私達は本質的に社会的存在物です。社会の中でなくては生きていけません。それと同時に私達は自と他を意識し、自己保存本能を個別に持ってあり、それに従って生きようとする個人的な存在でもあります。社会的存在でありつつ個人的な存在という矛盾した存在なのです。つまり、我々の内心を見ると我々は一方において自分の利益を守ろうとする欲と、他方で社会に何かせねばという義務感を持ち、自利と利

他の心を同居させ、葛藤しながら生きています。そういう我々人間が作っている社会は自然と行動の準則というものが必要になってきます。それが社会規範といわれるもので、典型的なのが宗教、道德、法律です。

では宗教と道德は何が違うのかという話になります。宗教は自利と利他を考えると限りなく利他を求めます。究極は自利、自我を否定するというような次元までいきます。道德はぎりぎりまで自利を抑制し、利他に励むが、最終的には自利、自我を肯定する世界で、そこが宗教と違う点だと言われています。それと同時に道德は幅が広く、利他にはげむ一方において、自利をどんどん発揮し、最低限度の倫理と言われている法律で規制されるまでいく。ですから道德は最低限度の倫理と宗教と限りなく近い道德と幅を持ち、自利も他利も認めている世界ということです。そうした中、我々は絶えず色々な環境や状況において、その場に応じて調整に悩んでいるというようなことをセントルイス宣言などは言っているのです。ポール・ハリスがロータリーは、宗教ではないと言ったことは、自我を滅却するまで大勢の人間に要求することは無理であると考えたからです。それと同時に過去の歴史を見ると、宗教といっはいますが、それが俗化し、権力化して大きな国家権力と結びつき、十字軍の遠征に見られるように宗教戦争等が多く行われてきた経過にポール・ハリスは気を配って、ロータリーを宗教から一線を画そうとしたのではないかと思います。もちろん、120年代まで、ロータリアンの中にも非常に倫理次元の高い方が多くいました。例えばコリント人みたいな人です。ですから、彼の最初の標語は「Service not self」で、自我を滅却する世界を標語にしようと言っています。1915年にすべてのロータリアンに適合する倫理訓、いわゆる道德訓が採択されました。その中でも我々は黄金律の普遍性を信じてとか、人を滅ぼそうとするより、人に滅ぼされん方を選ぶという言葉が出てきて、これらは宗教的次元を標榜しています。そうした様々な論争があったのですが、ポール・ハリスは、やはり、ロータリーの倫理運動として普遍的に発展していくために、宗教と一線を画そうとしたのではないかと思います。

紀元前200年程前、古代ギリシャの法哲学者カルメアデスが考えた、有名な「カルメアデスの板」という命題があります。客船が航海している最中に嵐に遭って難破し、多くの乗客が海にほうりだされると仮定します。Aという男がいて一生懸命泳いでいると、大人1人を浮き上げさせられる程度の1枚の板が流されて来て、それにしがみつき、助けを待とうとする。するとBという男が

近づいてくる。その板の所有権を2人が争うという極限状態に達した時どうなるか。Aが自分を守るためBをつきのけ溺死させる。これは許されるか。逆にBがAの板を奪い取りAを殺す。これは許されるのか。という命題が紀元前200年、今から2000年以上も前に議論され、法的な世界では両方が許されるという結論を出しました。それは何故でしょうか。このような二者択一の状況の極限状態において、自己保存本能により自分の命を守る人間は許さざるを得ないということなのです。2000年以上たった今も、現在のあちらこちらの刑法にこの思想が反映されています。日本の刑法でも、Aの場合は正当防衛ということで罰せられないし、Bは緊急避難ということで罰せられません。

宗教家はどうかでしょうか。私もそれなりに考えてみましたが、宗教家の立場であればAもBも許されない、自分の板を差し出さなさいということになっています。この様なことですので、ロータリー運動として、宗教的事業は難しいと思います。しかし、ぎりぎりの最低限度の倫理、法令を遵守していればいいとはロータリーの倫理は言っていません。先程の協議会でライオンズクラブの話をしました。このクラブはぎりぎりのところで法律を守っていれば自由に経済活動をしていい、そして残したものを浄財として皆で寄付をしようということになっています。しかし、ロータリーは行動自体に本質があるので、最低限度の倫理で満足してはいけません。出来るだけ高い所に行こう、出来れば宗教にぎりぎりの所まで・・・とそれをロータリー用語でいう奉仕の理想ではないかと思っています。それをポール・ハリスは出来るだけやっつけていこうと標榜しているのだと思います。

今カルメアデスの板の話をしました。実際色々な状況があるので単純には割り切れないでしょう。我々の経済活動も同じで、職業により専門的職業、実業的職業、或いは生産、販売、流通業等色々あると思いますので、すべて一律の議論は出来ないと思います。又、カルメアデスの板の状況でも色々あります。例えばBではなく父母だったら、或いは妻か夫であったらどうするのか。子供であったら、孫であったら。皆さんその立場に立って考えてみて下さい。色々あり得るのですが、宗教と道德の違いを最低限度の倫理ということで話を致しました。

次に、ロータリーは何故その様な道德倫理を現代生活の中でも実業的な職業生活に、その倫理を適応すべきであると説いたのかということ。1905年ポール・ハリスがロータリーを作ろうとしていた頃は資本主義社会の競争が激しく、拝金主義化して道德が低下し、人心は荒廃して行くといった社会情勢でした。そうした中で真面目に実業、或いは専門業種をしていたポール・ハリスとその仲間達がこれでいいのだろうかという疑問を持ちます。いくら経済が発達して大量生産・大量消費が可能になっても、人間関係が破壊されたのでは何にもならないと悟るのです。そこで異業種の人達が集まり、例会で親睦を深めて奉仕の意欲を高揚させ、そのエネルギーを各々の職業の場で「Save」の実践をすることにしたのです。これを私は人間関係を改善しようというのが真の目的であると思っています。シェルドンは「ただ、まず奉仕をしなさい、それが目的なのだ。そうすると結果として利益が得られる。最初から儲けようと思って奉仕をするのではない」という指導をしています。又、奉仕をする姿勢は職業生活が職業倫理にかなった行いになるとシェルドンは言っていますが、私は奉仕も目的ではなく、人間関係を改善することが真の目的であると思っています。職業生活に於いてこのことに全精力をかけるのが、我々職業人の使命なのだと考えました。

最後に先程申し上げた様にポール・ハリスは「ロータリーは宗教ではない、また宗教に変わるべき何者でもない。それは昔から存在する道德観念であり、それを我々の職業生活において実践することだ」と言っていますが、昔から存在する道德観念をもう少し最大公約数的に考え、宗教ではないがその概念する所は色々な宗教の教義と一致するとも言っています。解り易くキリスト教の教説を例にあげると、黄金律（マタイ伝第7章）では自分が人からしてもらいたいことを先ず自分が人にしなさいと言っています。もう一つは旧約聖書の教訓で、人からしてもらいたくないことをしないと言っています。これからもわかるようにロータリーの教義は宗教と一致するけれども、自我を認めるか否定するかということが違いであると思います。

次にロータリアン以外の人にロータリーとは何かと問われた時、どう答えるかを考えて頂きたいと思っています。私は意外に簡単に答えが見つかりました。我々日本の古くから伝わっている諺にぴったりするものがあります。一つは「情けは人の為ならず」一人に親切にしてください。それはその人の為だけにしたのではなく、巡り巡って自分の所に返ってくるのだから一という教えを、私は何の疑いもなくそうだと信じて今に至っております。もう一つは諺と言うより、近江の商人、中村治兵衛が孫に残した遺言の様なもので「三方に良し」です。「売り手良し、買い手良し、世間良し」という意味です。当時の身分制度の士農工商で商人が一番身分が低かったのですが、彼はこの世の中で商業は立派に役に立っている。武士が殿様に命を掛けているのと同じ位のことなのだと言ったのです。しかし、ただ自分だけが儲ければいいのではない。まず買い手にとって誠実な良い商売をすれば信頼が得られる。それが重なれば信用になる。そうすれば自分の商売は着実に利益が上がり、永続的に発展して行く。そしてそれが広がれば世間も良くなり、最後に売り手の自分が良くなれば良いということを行っているのです。これは「情けは人の為ならず」と全く同じではないでしょうか。何故これらが我々に理解出来るか。しかもロータリーの発祥よりも早くから日本にこの様な思想があったのでしょうか。理由は日本人、或いは東洋人のDNAにあると思います。要するにこの世の中は人間ばかりではなく、生きとし生けるものも包んで、我々の存在は持ちつ持たれつの関係にあると自然に分かっているからではないでしょうか。

西洋の思想、特にデカルト以降はそれ以前のスコラ哲学を疑いきったけれど、「我考えるゆえに我あり」と疑っている自分自身を最後に疑えなかった。つまり理性が絶対である、理性を持っている個人が絶対だという結

西洋の思想、特にデカルト以降はそれ以前のスコラ哲学を疑いきったけれど、「我考えるゆえに我あり」と疑っている自分自身を最後に疑えなかった。つまり理性が絶対である、理性を持っている個人が絶対だという結

論に達しました。そういった思想を背景に、科学文明絶対、経済絶対、国家絶対というような形で社会が色々と悩んでいます。コリンズの作ったセントルイス宣言は、西洋の人達は個人主義的ですから、あそこまで持つてくるのは大変であったと思います。第1条「ロータリーは一種の人間哲学だ。それはやさしく言うと自利と利他がいつも対立している。その対立、葛藤を調整する人生哲学だ」。そのものさしとしてService above Self、まず奉仕をなさい。「自己に優先する奉仕」と日本では訳されているものがあるのです。そうすれば巡り巡って自分も良くなるとまでは言っていないですが、この様な意味だと思っています。これは「情けは人の為ならず」と全く同

じことを言っているのではないかと思います。それから「最も多く奉仕するものは最も多く救われる」とも言っています。これは「三方に良し」そのものではないでしょうか。世間良しまではいいませんが、近江の商人は世間良しまで言っています。東洋の哲理の背景にはそうしたものがああり、有名な歴史学者ツインビーはこれからの西洋先進国が発展させた資本主義社会は、最終的に東洋の哲理に継らざるを得ないと言っています。私達ロータリーもある意味プライドを持ち、日本の諺の背景にある人間観、社会観、世界観の様な物を子孫に継承させて行く必要があると思います。